



● 学長就任挨拶

4月1日付で筑波技術大学学長に就任し、約3ヶ月が経過しましたが、今さらながら責任の重大さに身が引き締まる思いです。今後も緊張感をもって学長の責務を精一杯務めてまいりますので、ご協力とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。



学長 村上 芳則

さて、ご周知のように、筑波技術大学は、聴覚、視覚障害者を対象とした我が国で唯一の高等教育機関として「幅広い教養と専門的な技術とを有する専門職業人を育成し、両障害者のより良い社会自立を促進すること」「最新の科学技術を応用して、障害の特性に即した教育方法を開発し、障害者教育全般の向上に貢献すること」を目的としています。筑波技術大学の発展の基盤は、両障害者が大学教育の内容を確実に履修できる環境、豊かな学生生活を送ることができる環境の整備に努め、この目的を達成することであると肝に銘じ、行動して参ります。

本学は21年半前に「目や耳からの情報の取得に制限のある学生が、バリアのない教育環境で思う存分勉強し、持っている能力を開花させ、より良い社会自立をしてほしい」という多くの人々の願いの中で設立されて以来、これまでに約1300名の卒業生を社会に送り出すなど、社会参画・貢献できる人材の育成に多くの成果を上げています。本年4月には4年制筑波技術大学に第4期生が入学し、1年次から4年次までの学生が揃いました。19年前、3年制の短期大学として第1期生を受け入れ、50名の学生でスタートした本学は、今年度初めて360名の学生が在籍することになり、新たな1ページを開きました。今年度末には、いよいよ4年制の第1期生を社会に送り出します。

現在、各大学を取り巻く状況は非常に厳しいものがあります。18歳人口の急激な減少、学生の学力、生活力、精神力等の質の変化など、これまでにない状況への対応が求められています。本学に対しては、これらの状況への対応と合わせて、「大学院」や「理療科教員養成課程」を実現し、障害者のより上質な社会自立の促進という大きな期待が寄せられています。

このような時にこそ、本学の改革とさらなる前進により『教育力』を高め、学生はもちろんのこと、教職員にとっても、「来て良かったと思える筑波技術大学」の持続と実現に取り組み、高等教育機関として『社会から頼りにされる筑波技術大学』をより一層発展させることが不可欠です。この取り組みが現在の大学を取り巻く困難な状況を乗り越えていく唯一の道であると確信しています。これら（満足度の高い大学）を持続し、実現するために、在任期間中、以下のような施策に取り組みたいと考えています。

先ず「勉学環境の整備」です。学生が勉学に対して、最大限の努力ができる環境の整備、雰囲気作りです。基礎教育科目などの補講や補習を担当する「ラーニングセンター」の設置やTA（ティーチング・アシスタント）の増員配置、グループ学習室の整備や学習サポーターの配置などによる図書館への「学習支援機能」の付加の実現です。特に「授業」という集団教育で終わるのではなく、「学生への個別対応」の充実が必要と考えています。本学の教員は各自の専門分野の研究に加え、障害に対応できる教育方法の研究が必要であり、他大学の教員以上に多忙ですが、是非、少人数教育の特長を活かした「学生への個別対応」をさらに充実させるようお願いしています。

次に「教育の多様化」については、第1期生の卒業に合わせて「大学院」の22年4月設置、学生からの要望の多い「理療科教員養成課程」や「教職課程」の設置、短期大学時代の卒業生等のための「編入学」の定員化や「学び直し」受け入れ、さらには、研修生、留学生、特に韓国、中国からの「留学生」の受け入れを推進し、『多様な教育の需要』に応える体制、制度の整備に取り組みます。また、聴覚や視覚に障害のある留学生に対して、日本語や手話、点字、さらには基礎教育などを実施する「語学センター」の設置の実現に向けて調査を開始しました。このセンターは本学への留学生のみならず、他大学で学びたい留学生（聴覚や視覚に障害のある者）に対するセンターとしての機能を果たすことができるでしょう。

研究については、さらなる活性化を図りたいと考えてい

ます。大学において教員が行う研究活動は、学生に対する教育の一環です。教員が個々の専門分野の研究に熱心に取り組む姿を示すことで、学生は研究のすばらしさに気づくものです。教員が熱心に研究に取り組むことによって、研究の雰囲気がつくられ、また、この雰囲気が大学としての雰囲気を醸し出す非常に大切なものと思います。研究をしている教員への「研究場所の提供」「研究費重点配分」等の実施により、教員と学生がともに研究に励むことができる、より良い研究環境、若手教員が育つ環境を整えていく所存です。

さらに、本学の重要な機能の一つに他大学支援があります。障害者高等教育研究支援センターに全国共同利用・共

同研究拠点の機能を付加し、研究の活性化、支援機能の充実を図ります。将来的には、この支援センターが担う大学院の専攻を設置し、障害者への教育方法や情報保障方法・機器についての専門家を育成したいと考えています。

障害のある人々が社会参加のみならず、より良い社会自立が実現できるよう、各専門分野の教育と研究を大切に、『建学の精神』の忠実なる継承と発展に努力する所存です。今後ともご支援の程よろしくお願い申し上げます。以上簡単ですが、学長就任に当たっての挨拶とさせていただきます。

学長 村上 芳則

● 韓国再活福祉大と遠隔交流授業を実施



写真1 筑波技術大学における学長(当時)挨拶

平成21年2月17日 火曜日 産業技術学部の「聴覚障害学生のための専門教育高度化推進事業」の一環として、韓国の再活福祉大学と遠隔交流授業を実施しました。本学側では学生6名、再活福祉大学側では学生4名が参加し、両校の授業や情報保障の状況などの紹介、普段の学生生活の様子など、様々な情報や意見の交換を行いました。写真1は交流授業の開始にあたり挨拶をする大沼学長(当時)の様子です。



写真2 交流授業(筑波技術大学側)の様子

今回の遠隔交流では、ビデオ会議システムを使用しインターネットを介して筑波技術大学と韓国の再活福祉大学とを接続しました。筑波技術大学においては、講演者と学生

全体の様子とを画面合成してビデオ会議システムにて送信するとともに、再活福祉大学からのビデオ会議システムの受信映像、学生の発表用プレゼン資料画面、パソコン要約筆記字幕等を前面のスクリーンに投影し、交流を行いました。写真2、写真3は、プレゼンテーション資料に日本語だけでなくハングルを併記するなど、互いの意見を伝えようと積極的に交流している学生の様子です。

情報保障としては、筑波技術大学では日本語から手話への通訳、パソコン要約筆記による日本語字幕の表示が行われ、再活福祉大学においては韓国語から韓国手話への通訳、字幕の表示が行われました。日韓通訳は本学の劉准教授が担当しました。



写真3 交流授業(再活福祉大学側)の様子

将来的には、両校の学生が互いに協力し合いながら課題を解決して行くような授業展開や、単位互換制度の確立などに発展させていきたいと考えています。このため、両国における専門科目に対応可能な通訳体制のあり方の検討や、通訳や情報保障を介してもスムーズな交流が可能なシステムの構築に取り組んでいく予定です。

産業技術学部 産業情報学科 准教授 加藤 伸子

平成21年3月16日、東京・代々木にて、「筑波技術大学情報・理数点訳ネットワーク (<http://www.ntut-braille-net.org/>)」(東京近郊の六つの点訳グループが参加)の研修会が催されました。同ネットワークは、文部科学省特別教育研究経費「高等教育のための学内外視覚障害者アクセシビリティ向上支援事業 - 視覚障害者用学習資料の製作拠点の整備」事業の一環として、平成18年10月より運営されています。ここで点訳された図書は現在までに、個人や大学等に延べ200タイトル(約30万ページ)が提供されました。

ネットワーク発足以来、『図表作成技法』、『英語点訳ガイド』、『情報系図書点訳校正表』といった本学が刊行したテキストによる研修会を毎年実施してきましたが、今回は、二人の講師をお迎えし、「情報系図書の点訳に対するニーズの実際」と「点図作成ソフト・エーデルの詳細」について学ぶ機会を提供し、ネットワーク参加者のさらなるスキルアップを図りました。

● 最近の視覚障害者の読書事情

ITの進歩や活字本のグラフィカル化などに伴い、視覚障害者の読書形態は多種多様に変化してきています。例えば、

- ① 点字・点図データ(ピンディスプレイなどで読書)
- ② テキストデータ(PCの画面読み上げソフトで読書)
- ③ DAISYデータ(録音図書再生器やPCで読書)
- ④ ドットブック(PCで文字サイズや色調を変換して読書)
- ⑤ PDF(PCで色調変換や音声化の機能を使って読書)

のように、電子データにPCやIT機器でアクセスする形の読書が一般化しています。実際、本ネットワークが点訳した図書についても、電子データの提供依頼(点図のみ印刷)が増えています。そのような背景のもと、研修に参加した約90名は講師のお話に熱心に耳を傾けていました。

● 情報系図書点訳の課題(藤原晴美氏)

研修会の前半は情報系点訳図書を利用する側から見た点訳の現状と課題についての講演でした。次のような要点ごとにきちんと整理されたわかりやすいお話に、受講者は実感を持って納得したようでした。

- ① 点訳依頼を時間的制約からあきらめる場合が多い
- ② 理想的な図書の出版は、活字版の発行と同時に多様な形態でも提供されることが望ましい
- ③ 触覚はきわめて主観的なものであり、ようやく触覚の数値化の研究が進んできたばかりなので、点図の作成には読者との妥協点をみつけるための努力が必要

● 点図作成ソフト"エーデル"(藤野稔寛氏)

後半は、点図作成ソフトとして広く普及している"エーデル"の開発者による講演と質疑応答でした。氏は、「これまで約18年間、全国の点訳ボランティアの方からいろいろな要望・意見をいただいたおかげで、"エーデル"がここまでできました。今後も引き続きご意見をいただきたく、お願

いいたします。」との挨拶のあと、点訳者からの"エーデル"に関する多くの質問や要望等に熱心に回答をされました。多くの点訳者との直接の交流は今回が初めてだった同氏は大きな手ごたえを実感されたとのことでした。



"エーデル"について講師と意見交換をする受講者たち

【"エーデル"に関する質疑応答(抜粋)】

Q. 直線・折れ線・円弧などを作る機能に二重線を引く機能をつけていただけると嬉しいです。

A. これはなかなか難しいと思います。でも、このように最初お話を伺ったときはとうてい難しいと思ったことも、ふとしたことで可能になったりすることもありますので。

Q. 異常接近点の処理のとき、優先したい点を指定できる機能がほしいです。

A. あとから描いたものを優先したい、そういう選択肢もあってよいのでは、ということですね。

最近では、"エーデル"の発展版で、点字文章の中の自由な位置に図を挟みこむことが可能になったエーデルブックの使用が急速に広がっています。本ネットでも平成20年度に点訳された図書の約半数がエーデルブックで納品されました。このソフトのさらなる発展が期待されます。

● 視覚障害者への情報提供の今後の方向性

最近のグラフィカルな活字本の情報を、単一の媒体で十分に伝えることは困難な状況になってきました。点訳者もさまざまな技術を身につけ、複合媒体、あるいは統合形式のデータによる情報提供に対応できるよう求められていることが、この研修会でも明らかになりました。

障害者高等教育研究支援センター
特任助手 辰巳 公子
特任研究員 富澤 邦子

● 日本教育オーディオロジー研究会上級講座 (2009)

日本教育オーディオロジー研究会(会長 大沼直紀)は、聴覚に障害のある子どもの聴覚の評価と管理、補聴器の選択とフィッティングなどの聴覚補償、コミュニケーション支援及び全人間的な発達の視点からみた聴覚の支援について、学校現場における教育的な観点から研究を行うことを目的として設立されました。会員は、聾学校(聴覚特別支援学校等)、通級指導教室及び難聴学級の教員が中心となっています。

平成21年2月13日 金曜日～2月15日 日曜日の日程で、日本教育オーディオロジー研究会上級講座—2009—が本学との共催で開催され、聾学校(聴覚特別支援学校等)・通級指導教室・難聴学級の教員、難聴幼児通園施設等の言語聴覚士、認定補聴器技能者など80名が参加しました。



講演をする大沼直紀学長(当時)

● 全体講座「個別指導における聴覚学習の実際」

この講座を担当された中村公枝先生は、国立障害者リハビリテーションセンター学院にて言語聴覚士の養成に携わる傍ら、難聴幼児とその保護者の支援について長年関わってこられました。この講座では、実際に個別指導における事例の映像を紹介しながら、子どもの日常生活を基本とした聴覚学習支援のあり方についてわかりやすく解説していただきました。

● 25の分科会(選択講座)

この上級講座の特色は、全員参加型の25の分科会を設けていることです。また、受講するだけでなく参加者それぞれが問題点を挙げ、議論する形をとっています。

選択講座Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにおける「FM補聴器のフィッティングと計測」、「オープンフィッティング」、「補聴器の計測と調整」、「発達障害と聴覚情報処理の困難」、「満1歳までの聴覚評価と補聴器装用支援」などの講座は、日頃、教育現場で問題になっている事柄が中心となっており、参加者はそれぞれの持つ問題について担当講師に質問したり、講座の参加者同士で議論したりして、問題の解決策を検討していました。

選択講座Ⅳ、Ⅴにおける「新しいFM補聴システムについて」は、日進月歩であるFM補聴システムならびに補聴器に関する最新情報を補聴器メーカーに在籍する認定補聴器技能者ならびに言語聴覚士の方からご提供いただきました。それぞれの学校教育現場等で限りある予算の中でいかに効率よく運用できるかについての話題が中心となりました。

選択講座Ⅵ「事例検討」については、「乳幼児事例検討」、「地域支援事例検討」、「FM補聴システム事例検討」、「重複障害事例検討」などの分科会が設けられた。ここでは、講義の形を採らず、上級講座スタッフがコーディネーターとなり、参加者が関わっている事例を中心にそれぞれが持つ課題などについて熱心な議論が行われました。

● 本学からの話題提供

本学からは、障害者高等教育研究支援センターの三好茂樹准教授が、選択講座Ⅱ「様々な情報保障」、全体セミナー「高等教育機関に学ぶ聴覚障害学生への教育オーディオロジー的支援について」について講義を担当しました。「様々な情報保障」では、本学が取り組んでいる聴覚障害学生の高等教育支援における情報保障の実際について解説がなされ、「高等教育機関に学ぶ聴覚障害学生への教育オーディオロジー的支援について」は、他大学からの教育的オーディオロジー的支援が増加している現状を踏まえて、当研究会が担うべき役割についての検討がなされました。

● 公開講座

2月15日 日曜日の最終日は公開講座として、上級講座の参加者だけでなく、一般の参加者にも公開する形でこなされました。また、この日は韓国のSoon Chun Hyang大学の李先生と学生15名が特別参加し、本学総合デザイン学科劉准教授の資料翻訳ならびに同時通訳の協力で受講しました。公開講座は午前、午後ともに当研究会の会長である大沼直紀学長による「教育オーディオロジー—専門性の保障」及び「教育オーディオロジー—聴能の評価法」の全体講演で行われ、大沼学長のこれまでの実践、教育オーディオロジーの学問としての確立、聴覚的支援の在り方について講演していただきました。また、参加者もそれぞれの日々の実践と重ね合わせながら興味深く聞き入っていました。

● 情報収集のみではなくネットワーク作り

今回、参加した教育オーディオロジーの担当教員は都市部での教育機関を除いて、一人で担当していることが少なくありません。聴覚障害児教育におけるこの領域の専門性の維持について苦心していることもあり、同じ境遇の参加者との情報の共有も意味あるものとなってきます。その意味で、当講座はネットワーク作りについても大きな役割を担っています。

障害者高等教育研究支援センター 教授 佐藤 正幸

● 大学等を卒業した聴覚障害者の就労に関するシンポジウムを実施

● シンポジウムの概要

本学の前身である筑波技術短期大学は平成4年度の第1期卒業以来、聴覚障害関係学科からはこれまでに約650名の卒業生を社会に送り出してきました。この間、就職率は毎年度ほぼ100パーセントを維持しており、本学の使命である「障害者の社会自立としての就労」という一つの大きな目標を達成してきたといえるでしょう。しかし一方で、卒業生の数が増加するにつれ、卒業生自身や彼らを雇用する企業等からの職場適応に関する相談も増えてきました。各相談に対しては聴覚障害系就職委員会委員をはじめ本学教員が協力して対応してきましたが、多くの事例において背景に聴覚障害に起因した問題があり、事態の改善には職場(企業等)、学校、行政機関の連携が求められてきました。

このような状況の中、本学就職委員会では教育研究等改革・改善事業として平成18年度から毎年度、下記の事項を目的とした「大学等を卒業した聴覚障害者の就労に関する産学官連携シンポジウム」を東京都内で実施してきました。

- ・ 大学等を卒業した聴覚障害者の就労に関する現状と課題を明らかにする。また具体的な改善事例を検証する。
- ・ 組織間、個人間で具体的な課題に関する問題意識を共有し相互に連携して状況を改善するための基盤づくりをする。
- ・ 学校(教育)が担うべき役割を明らかにする。
- ・ 聴覚障害者の就労状況の改善に資する情報を提供する。



シンポジウムの様子

● 平成20年度シンポジウム

第3回目となる平成20年度のシンポジウムは、前年度までに積み上げられた議論をもとに、「就職前の教育」「就職後の人材育成」を主なテーマとし、平成21年3月17日火曜日、秋葉原コンベンションホールにて開催されました。参加者は企業の人事担当者、聴覚障害社員等48名でした。内容等は以下の通りです。

- ・ 講師：岩佐純氏(独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構東京障害者職業センター多摩支所)
- ・ シンポジスト：平林裕一氏(トランスコスモス株 本学卒業生)／岩崎佐智子氏(ノボノルディスクファーム株 本学卒業生)
- ・ 話題・情報提供：石原保志／三好茂樹(筑波技術大学)
- ・ 内容・日程
13:00 主催者挨拶／企画趣旨の説明

- 13:10 - 13:50 講演「障害者の職場適応に関する相談、対応と各機関の役割」(岩佐氏)
- 13:50 - 14:20 話題提供・討議(就職前の教育／就職後の人材育成／キャリアアップ)
- 14:20 - 16:00 情報提供「音声認識による情報保障」(三好)



岩佐氏の講演

まず講師の岩佐氏から、障害者職業センターを中心としたジョブコーチ支援について説明をいただいた後、職場におけるコミュニケーション環境を整備し聴覚障害者のキャリアアップを図った事例、聴覚障害社員が抱える疎外感を改善した事例、職場の人々が聴覚障害者の多様性を理解しスキルアップを推進した事例などについてお話いただきました。

話題提供・討議では、シンポジストの平林氏、岩崎氏(いずれも本学卒業生)を中心に議論が展開されました。就職前の教育については、本学卒業生を雇用する企業から「遅刻」などの就業態度の問題が指摘され、教育段階での就労レディネス育成の課題が示されましたが、シンポジストからは、自身の入社当時の心理状態やその後の職場経験を通じた社会人マナーの習得過程が紹介され、聴覚障害者という枠で捉えてほしくない旨の発言がなされました。就職後の人材育成に関しては、新入社員研修等におけるコミュニケーションおよび情報保障の問題が浮き彫りにされ、体験学習、問題解決学習、コミュニケーション研修など各社の工夫が、会場およびシンポジストから紹介されました。

本学からの情報提供は、近年、卒業生等からの質問、相談が多い「音声認識技術を活用した情報保障」について、支援センターの三好准教授から現状と将来の可能性について具体的な知識を提供しました。

聴覚障害系就職委員会委員長
障害者高等教育研究支援センター教授 石原 保志

● 北京連合大学特殊教育学院からの招聘者研修報告

● はじめに

保健科学部鍼灸学専攻では、平成20年度国際交流活動の一環として「視覚障害者の鍼灸手技教育に関する日中国際交流」を平成21年3月9日～3月14日に実施しました。日中国際交流は、これまで中国への訪問研修が3回、中国から本学への招聘研修が昨年の長春大学特殊教育学院に続いて第2回目となります。視察研修は受け入れ部署および機関の協力も十分に得られ、また、研修者が体調を崩すことも無く順調に実施され有益な研修となりました。日程に沿って研修の概要を報告することと致します。

なお、招聘経費は国際交流委員会管理運営費および筑波技術大学研究助成財団からの支援によるものです。



写真1 情報システム学科で視覚障害に適応させた同学科のログイン認証について説明を受ける研修者

● 研修目的

日本では、鍼灸手技療法是視覚障害者の職業として長い伝統があり、それに関わる視覚障害者教育も充実しています。

大学間交流締結校である北京連合大学特殊教育学院にて視覚障害者教育に携わっている教員と将来の鍼灸手技療法を担う学生を招き、本学における鍼灸手技教育に参加して頂き、両国の指導法や治療技術の交流を通して今後の視覚障害者教育や鍼灸手技教育の発展を図る。

また、本学の特色ある障害者教育の現場や施設の見学あるいは授業、課外活動への参加を通して研修を深めてもらうとともに、本学の学生との交流を図る。

● 招聘者

教員 2名：

韩 萍(Han Ping：北京連合大学特殊教育学院 副院長)

邱兆熊(Qiu Zhaoxiong：鍼灸・マッサージ科 教員)

学生 2名：

杨 宇航(Yang Yuhang：鍼灸・マッサージ科 4年生)

张 利宁(Zhang Lining：鍼灸・マッサージ科 3年生)

● 研修日程とその概要

○3月9日月曜日：来日(北京発9:30 成田着13:50)、歓迎会
成田国際空港からリムジンバスで県南の田園風景を眺め

ながらつくばセンターまで移動し、大学の紫峰会館に到着する。休息を取ったのち、歓迎会(つくば・山水亭)が開催され、大沼学長、村上副学長、小野保健科学部長、一幡国際交流委員会委員長、荒木同副委員長および鍼灸学専攻教員8名が出席されました。招聘者の皆様からは、自己紹介とこれからの本学での研修についての抱負が述べられ、日本風料理に舌鼓を打ちながら楽しい一時を過ごしました。

○3月10日 火曜日：学長表敬訪問、両キャンパス施設見学

午前は、学長から筑波研究学園都市の概要と筑波技術大学の特色および役割について説明がありました。筑波には外国人研究者や留学生が非常に多いことに驚きを持ったようでした。

産業技術学部では荒木勉先生と張晴原先生の案内で、聴覚障害学生がコンピュータを駆使して連続化した機械設計・加工プロセスあるいは快適で安全な建築の総合計画・設計等を学習する講義室および実習室を見学しました。聴覚障害学生に対する学習環境づくりについて理解を深めた様子でした。

午後には、小野保健科学部長から学部の概要について説明を受け、その後学科専攻の見学に移りました。情報システム学科では、最新の情報機器システムやコンピュータに容易にログイン出来るスマートカードによる認証、弱視学生に対しての液晶モニター、全盲学生に対してのペンディスプレイや点図ディスプレイ等の説明を受けました(写真1)。

理学療法学専攻では、リハビリテーションに関する実習器具あるいは日常生活を補助する設備や器具等の説明を受けました(写真2)。北京連合大学特殊教育学院では、これから理学療法学科の設置を検討する予定とのことで、かなり詳細な内容の話し合いが行われました。



写真2 本学理学療法学専攻での見学の一コマ

障害者高等教育研究支援センターでは、視覚障害学生の体育館における安全性を確保するための床傾斜の工夫や衝突した際の壁のクッション取り付け等の施設づくりについて説明を受けた。学生の安全性を最優先する配慮に感動を受けた様子でした。また、視覚障害補償支援システム施設では、本学で研究開発された点字印刷機、視覚障害の程度

に応じた多種類の拡大読書器、音声対応のコンピュータ、色彩を判別してくれる機器等の見学と説明を受けた

○3月11日 水曜日：鍼灸3年次の授業見学、招聘者による講演会、手技療法技術交流会

午前は、鍼灸学専攻3年次のカンファレンス授業に参加した。学生一人一人が患者さんを担当して、問診・症状の把握・治療方法の決定・実際の治療・成果等の一連の経過をまとめ発表し、教員あるいは学生との間で問題点を討論するものであった。招聘者の先生方は本学学生のきめ細かい資料作成と発表内容に感動し、学生がまとめた発表資料を中国に持って帰りたいとの申し出を受けた。

午後には、講演会が開催された。Han Ping 副院長からは「中国の視覚障害学生の教育について」、Qiu Zhaoxiong 先生からは「中国の伝統推拿について」の講演と実演が行われました。鍼灸手技実習棟で行われた実技演習では、鍼灸学専攻3年次を中心とした本学学生と中国学生との間で熱気あふれる技術交流が行われた。技術交流会は当初予定していたスケジュールでは双方とも満足せず、1回目の手技療法、2回目の鍼灸療法と2日間に渡って熱心に行われました(写真3)。



写真3 技術交流会にて

講演会では中国の視覚障害者教育方法、鍼灸手技制度や視覚障害者の就労状況についての理解が得られた。また、実技演習では両国相互の伝統的な鍼灸手技療法の相同点と相違点についての意見交換および検討が行われ、両国の技術交流を深めました。

○3月12日 木曜日：日本点字図書館見学、日本文化探訪

午前に視覚障害者のための点字・録音図書や雑誌の製作貸し出し、触図の製作、点字・パソコン教室の開講及び盲人用具の開発販売等の事業を行っている日本点字図書館を見学しました。点字・録音図書の蔵書数、点字・パソコン教室の開催回数と受講者数、そしてこれらの事業に携わる

ボランティアの人達の膨大さに驚いていた様子でした。

午後には、日本文化探訪ということで浅草と秋葉原を訪れました。浅草の雷門をくぐって本殿までの仲見世では、日本伝統の玩具、菓子、みやげ品等を扱うお店を訪れ日本の情緒を味わった様子でした。また、秋葉原の電気街では、Qiu 先生が日本製の高級デジタルカメラを購入しましたが、先生はこの日を境に時間を忘れるかのように、見るもの聞くもの、「高級スポーツカーからすぎの家牛井」までカメラに収めておりました。学生さんは本国で待っている両親や兄弟あるいは大学に残って勉学に勤しんでいる友達にお土産を買込んでおりました。特に、百円ショップは人気があったようです。

○3月13日 金曜日：進路先見学、鍼灸療法技術交流会、東西医学統合医療センター見学

鍼灸学科卒業生の丸山哲生さん(第15回短期大学卒業生)がヘルスキーパーとして働いている株式会社クラレつくば研究所での就業現場を見学しました。会社内に立派に設置された施術室の見学やそのための法的援助等の説明に大きな驚きを持った様子でした。

午後には、東西医学統合医療センターの見学が行われ、診察室の在り方、患者さんへの対応の仕方、日本製鍼灸器具の説明を通して相互の理解を深めました。

○3月14日 土曜日：帰国(成田発 14:55 北京着 17:30)

紫峰会館を出発するにあたり、荒木国際交流委員会副委員長がわざわざ見送りに来て下された。招聘者の皆さんは感激し、研修が非常に有益だったこと、本学の受け入れ体制に感謝していること等が述べられました。午前中は常磐線が不通になる程の強風が吹き荒れ、飛行機の出発が危ぶまれましたが、午後には中国の皆様のご帰国を察したかのように急に風が治まり無事離陸することが出来ました。深夜に、定刻通り北京に到着したとの連絡が有りました。

●研修成果の今後の活用、展望および課題

日中両国における鍼灸手技療法に関する相同点あるいは相違点等を検討し、本学において取り入れ可能な技術を改良開発することが出来ると思われれます。また、視覚障害者教育方法等に関する補償支援機器あるいはソフトの開発に活用していくことも可能です。

国際交流事業の一環である視覚障害者の鍼灸手技療法教育に関する日中国際交流は、これまで本学から中国への研修、中国から本学への招聘研修が行われ、両国における鍼灸手技療法教育の理解を深めてきた。今後、鍼灸手技療法が世界的に益々広まっていくなかで、日中の技術交流はこれからの鍼灸手技療法教育における礎になることと思われれます。

保健科学部 鍼灸学専攻 教授 坂本 裕和

● 筑波技術大学国際交流事業 日韓学生・教員のワークショップを実施

1. 活動の概要

本学の国際交流事業の一環として、平成21年3月21日～3月26日の日程で韓国の2つの協定締結大学を訪問し、「日韓学生・教員のワークショップ」を実施しました。

韓国ナザレ大学では、「就職」と「教育情報保障環境」の2つのテーマについてワークショップを行いました。日韓学生の発表や質疑応答などの国際交流の様子は本学と先方の大学にもインターネットを介してライブ中継で送られました。国立韓国再活福祉大学では、遠隔通訳スタジオや学生寄宿舎などの施設見学と、学生交流会を実施しました。

2. 活動の目的

今までの視察・見学・訪問中心の日韓交流から、両国での聴覚障害者教育に強く関わる学生4人と教員7人が、テーマに沿った議論(ワークショップ)への自主的参加を通して、現実的で、実践的な聴覚障害者高等教育の問題点を探求し、解決策を模索することが、今回のねらいでした。

3. 訪問組織

ナザレ大学(ペンタク市)

韓国国立再活福祉大学(チョンアン市)

4. 各ワークショップのテーマと進行プログラム

ワークショップは2グループに別れ、小生の総合進行により各々のテーマについて討議を進めました。各グループには日韓音声通訳者を付け、日本語・韓国語に対応し、かつインターネットに繋がるパソコンを用意しました。学生が主体的に議論を進められるように、教員は議論の補佐に徹するように務めました。

● 第1グループ：就職について

第一グループの論題は「職場における障害に起因した困難性に備えてーコミュニケーション、情報受容(情報保障)、キャリアアップなどー」で、メンバーは日本学生2名(斉藤、古田)、韓国学生2名、日本教員2名(石原、皆川)、韓国教員2名でした。

両国の学生は、自国の現状と問題点を事前に調べ、プレゼンテーションソフトにまとめ、それを発表し合うことから議論をはじめました。

ここでの主題は「就職すること」ではなく「就職した後のこと」ということで、ほとんどの学生は就労経験がないと思われるが、職場で自分自身がどのような状況におかれるかを、どれだけ予想できるかが、議論の厚みを増す上で重要でした。

グループ内の議論を通して、上記①で予測した状況に対して、自分達はどのように対応するか、そのためには就職するまでの間にどのような意識、能力、知識、技能を身につけておくべきかを提案し合いました。

一般論でなく、自分(たち)はどうするか、どうしたいかという意見が、議論の厚みを増す起点になったと思います。

● 第2グループ：教育情報保障環境

第二グループの論題は「教育情報保障環境」で、メン

バーは日本学生2名(氷室、足立)、韓国学生2名、日本教員2名(金田、須藤)、韓国教員2名でした。

第二グループも、自分達の大学での受講している情報保障環境の状況を、事前にプレゼンテーション用シートにまとめて報告し合いました。そこから、各自が感じた問題点について理由を添えて提案し、その中から誰もが問題と考えるものについて、解決策を皆で検討し、その解決案を図や文章などを使って、再度まとめました。(英語または母国語でパソコンデータ化)

● 最後に、各グループの代表が、母国語または母国手話でパソコンを用いて討議内容を発表し、それについて全員で質疑応答をしました。



5. 得られた成果

各大学や障害教育の状況について情報交換を行い、障害者教育を専門とする立場にあっても、本交流会は日韓両国における障害者高等教育の現状や研究の方向性、また専門知識を共有する相互理解を深めることができました。また、両国の恵まれた、いや寧ろ最先端の障害補償環境で学ぶ聴覚障害学生にとっては、教育環境や社会制度などについての熱い討論や質疑応答がなされ、発表力の向上と同時に、異なる生活文化や考え方の接触の中から新たな発展を予感させる議論ができたと感じています。

ただ、韓国ナザレ大学でのテーマ別ワークショップでは、日韓の会話通訳と手話通訳を相互に織り交ぜながら実施しましたが、日韓間では通じていても簡単に英語や手話にはできないと感じることがあると思えば、特に韓国側の通訳においてはハンデルで一般の韓国人が気にしないような基礎的問題でも日本語訳では困難を要する場面があり、まさに言語の壁問題に直面しました。

こうした日韓学生・教員の交流会から複数の目標が見えてきたと思います。両国間の関係維持に始まり、対等に発言出来る機会の継続、互いの研究への関心を高めること、そして若い研究者や学生の交流のきっかけの場になること、などです。

産業技術学部 総合デザイン学科 准教授 劉 賢国

お知らせ

平成21年度大学説明会等のご案内

- 産業技術学部 関西地区説明会 平成21年7月5日(日) 10:30～12:00, 13:00～15:00 新梅田研修センター 大阪市福島区福島6-22-20
- 産業技術学部 オープンキャンパス 平成21年8月8日(土) 10:00～16:00 筑波技術大学 天久保キャンパス つくば市天久保4-3-15
- 産業技術学部 授業見学会 平成21年10月9日(金) 13:00～16:00 筑波技術大学 天久保キャンパス つくば市天久保4-3-15

- 産業技術学部関係の申し込みと問い合わせ 筑波技術大学 聴覚障害系支援課 教務係
〒305-8520 茨城県つくば市天久保4-3-15 Tel 029-858-9334 又は 9329 Fax 029-858-9335
E-mail opencampus@ad.tsukuba-tech.ac.jp

- 保健科学部 東海会場説明会 平成21年7月11日(土) 14:00～17:00 河合塾16号館名古屋校 名古屋市中村区亀島2-6-4
- 保健科学部 関西会場説明会 平成21年7月12日(日) 14:00～17:00 大阪ガーデンパレス 大阪市淀川区西宮原1-3-35
- 保健科学部 九州会場説明会 平成21年7月18日(土) 14:00～17:00 福岡ガーデンパレス 福岡市中央区天神4-8-15
- 保健科学部 北海道会場説明会 平成21年7月26日(日) 9:30～12:00 北海道高等盲学校 札幌市中央区伏見4-4-21
- 保健科学部 オープンキャンパス 平成21年8月7日(金) 10:00～16:30 筑波技術大学 春日キャンパス つくば市春日4-12-7
- 保健科学部 オープンキャンパス 平成21年8月20日(木) 10:00～16:30 筑波技術大学 春日キャンパス つくば市春日4-12-7

- 保健科学部関係の申し込みと問い合わせ 筑波技術大学 視覚障害系支援課 教務係
〒305-8521 茨城県つくば市春日4-12-7 Tel 029-858-9507～9509 Fax 029-858-9517

平成21年度公開講座のご案内

平成21年度の筑波技術大学公開講座は、次のとおり開講されます。受講申込方法等の詳細については、ホームページ (<http://www.tsukuba-tech.ac.jp/openlecture.php>) で公開しています。なお、日程を変更する場合がありますので、筑波技術大学 総務課 企画・評価係 (TEL 029-858-9311、FAX 029-858-9312) までお問い合わせ下さい。

- 聴覚障害系の講座
 1. 聾学校での造形教育に関する指導法
開催期日：7月31日(金)の1回 (6時間) 対象：聾学校等の教諭及び聴覚障害教育関係者等
定員：10名 受講料：6,200円 申込締切：7月6日(月)
 2. 聴覚に障害を持つ高校生を対象とした「コンピュータ・グラフィックス入門」
開催期日：8月4日(火)～8月6日(木)の3回 (18時間) 対象：聴覚に障害がある高校生
定員：10名 受講料：8,200円 申込締切：7月16日(木)
 3. 基礎から学ぶCAD操作—CADによるペーパーカーの製作を通して—
開催期日：8月25日(火)～8月28日(金)の4回 (18時間) 対象：市民一般
定員：10名 受講料：8,200円 申込締切：7月28日(火)
- 視覚障害系の講座
 4. 腰下肢痛のリハビリテーション
開催期日：8月1日(土)の1回 (5時間) 対象：市民一般
定員：15名 受講料：5,200円 申込締切：7月13日(月)
 5. 誰でもわかるホームページ、ブログ作成とアクセシビリティ入門
開催期日：8月19日(水)・20日(木)の2回 (10時間) 対象：市民一般及び視覚に障害を持つ人
定員：10名 受講料：5,200円 申込締切：7月21日(火)
 6. 医師のための鍼灸実践講座
開催期日：9月～11月の3回 (12時間) 対象：医師、歯科医師
定員：10名 受講料：7,200円 申込締切：8月5日(水)